

資料紹介

外国人の見た薩摩焼

山下 廣幸

(本館 学芸課長)

平成10(1998)年は、朝鮮陶工が鹿児島に上陸して、薩摩焼が発祥してから400年を数える記念すべき年であった。鹿児島県歴史資料センター黎明館においては、薩摩焼発祥400周年記念展「世界のさつま」を開催した。

この記念展は、薩摩焼400年の歴史と現代の薩摩焼を紹介するものであったが、特に400年の歴史の中で、幕末から明治時代にかけて薩摩焼が世界に雄飛した時期があった。この時代の薩摩焼は、「SATSUMA」と呼ばれ東洋的、日本的な上絵付けの色絵に、金を多用した薩摩金襴手の大型で豪華な作品が中心で、ヨーロッパやアメリカなどに多数輸出されている。

ここでは、この時代の外国人が、薩摩焼をどのように見ていたかを知ることの参考になる資料を紹介する。

1 THE KOREAN POTTERS IN SATSUMA

BY E. SATOW, ESQ.

この文献は、明治時代初期の代表的な外交官アーネスト・サトウによって、1978(明治11)年2月23日付けで『Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol.6, Part 2』(1878)に発表されたものである。

アーネスト・サトウ(Sir Ernest Mason Satow, 1843-1929)は、ロンドンのクラブトン出身のイギリスの外交官である。ユニバーシティ・カレッジで学び、1861年日本の領事部門に勤務する通訳生としてイギリス外務省に入省している。文久2(1862)年8月15日、横浜に着任するが、生麦事件がその6日後に起こっている。明治15年まで日本に勤務し、この間サトウの地位は、通訳生、通訳官を経て日本語書記官、公使と昇進しており、イギリスの対日政策に活躍している。

この文献は、20数年も前にならうか、当時はまだ湿式のコピー機で複写したものであったが、これを入手してあらかじめ翻訳して読んだ記憶があった。この文献が再び目に触れたのは、横浜開港資料館の吉良芳恵調査研究員の協力により、新たに鮮明なコピーをいただいたからである。そして、古い翻訳原稿の見直しに、当館の是枝智美資料調査編集員及び定美穂子さんの協力を得た。

(翻訳) 薩摩の朝鮮人陶工

近頃の情報からわかるように、かつて朝鮮人は、今日よりはるかに高度な物質文明を満喫していたようである。

16世紀の日本軍侵入による朝鮮半島の荒廃のひどさを思い、文明がそのような惨事から回復しつつあるといったような総合的困難さを考えるとき、前世紀において日本人が命令するようになってい

も、現代の朝鮮人が有用な技術において、日本からかなり遅れていても不思議ではない。

朝鮮から日本へもたらされた技術の一つは製陶技術で、それは500年も昔から伝わるものであり、白色半透明の朝鮮焼のように見えるものである。朝鮮人陶工は、多くの犠牲をはらって、この技術の秘伝を保持していた。

日本国民は、常に他のものから学びがちであり、歴史前といえる位の時代からいろいろな時代に朝鮮人技術者を定住させており、これらの移住者が、いくつかの製陶技術を確立したと言われている。蝸川武胤が『観古図説』（日本の焼物の歴史）の第5章で述べていることからわかるが、楽焼と呼ばれる陶器は、最初秀吉が京都へ連れて来た朝鮮人が作った。窯は聚楽第に作られ、その名に由来して名前が付けられた。

最初に豊前上野、後に肥後の八代に定住した者達の子孫は、1598年の日本軍の朝鮮からの引き揚げ後も、上野焼の生産を続けた。他の朝鮮人は、長門、萩近くの中ノ倉焼の製作者になった。

薩摩地方においては、朝鮮人の陶工だけが住む村があり、彼らの先祖は、同じ頃故国から移住させられた。これらの人々の先祖は、1598年に薩摩の領主島津義弘によって連れてこられ、鹿児島に住まわされた。これらは三つの村に分かれており、日置地区の串木野、市来、神ノ川であった。

その後、彼らのうちのいく人かは、鹿児島湾沿いの大隅の帖佐に移り、技術を生かした。彼らの子孫は、今日までそこに住んでいる。

1603年末、大部分の者は、鹿児島から12マイルはなれた市来との間の高原の村である苗代川の壺屋に集められた。彼らは、伸、李、朴、下、姜、鄭、陳、林、白、崔、沈、廬、金、何、丁、車、采の名前の17姓であり、子孫はこれらの姓を継ぎ、日本流に発音した。彼らの間で使われる名前は、朝鮮人の慣習に従って、二つの中国音節から成っているが、婦人達はフデとかユキといった日本式の名前をつけた。村の人口は、1,500人位であった。

捕虜になった最初の代の陶工が作った焼物は、黒の釉薬をかけた、暗色できめの細かい種類のものが主であった。この種のもの生産は壺屋で行われ、急須、土びん、土鍋、乾燥した茶葉を入れる大きな甕などを作った。1624年から1644年の間に、朴貞用という熟練工が、加世田で白砂、指宿で白粘土を発見した。この時期からヨーロッパの鑑定家が重視している白薩摩のヒビ焼（ヒビキ絵）と呼んでいるものを生産した。しかし、その後色を付けて飾った焼物が出てくるが、古いものにはそういったものはない。

18世紀末、加治木の住人で朝鮮人の金海と川原芳工が、焼物に模様や風景を描く方法や錦絵の彩色のやり方を習得するために京都に行った。このことによって薩摩焼は、いっそう大きな名声を得るようになった。この様式の最も素晴らしい作品は、立野という所に薩摩の領主が設立したいくつかの製陶所で作られた。しかし、それらは6～7年前に田ノ浦という鹿児島の東1マイルの湾沿いに移住していた。

焼物は、領主自身が使うため、あるいは将軍や他の大名への贈物として費用を無視して生産されたので、出来ばえはすばらしいものであった。鑑定家は、なめらかさ、絵付け、柔らかな調和的彩色によって区別している。

最後の数年間、彩色したヒビ焼はまったく私的、個人的に製作されたか、あるいは地方行政の資金

調達のため同業組合によって製作された。そして、収集家の関心がはられなかったために、維新の年1869年以来生産されていないと言われる。

昨年の2月、筆者は壺屋の朝鮮人村を訪ねた。その住民の一人に親切に泊めてもらい、もてなしを受け、一人の日本人の友達に特に気に入られた。人々の容貌は、何ら違わないし、家の建て方にしても旅行者の注意を引くようなことは何もない。彼らはすべて故国の言葉のように日本語を話し、日本の着物を着ている。実際に、壺屋というのはまったく他の村と同じようなものである。朝鮮人の主な製陶所は、玉山会社の窯と一緒に、本街道の南側、丘の横にある。同業組合は、近頃鹿兎島の武士によって始められた。壺屋のヒビ焼は、この会社と街道の反対側にある沈寿官という朝鮮人のところで生産された。しかし、村民の大部分は、普通の褐色の陶器を生産した。

労働の分離の原則は、十分に理解され、職工に応用されているようである。たとえば、一人で急須の本体の製作だけやると、1日に約150個作ることができる。2人目は蓋を作り、3人目は口を作り、4人目は耳、あるいは取っ手をつける部分を作り、5人目はこれらの部分品を一緒に集める。一般的に家族の者が協力して働く。このように共同的な一団が、他の一団と共に窯の持ち主となる。

粗い焼物に使う粘土は、市来近くの伊作田、神之川、伊集院の近くの寺脇、久木野、野田で発見されており、すべて壺屋の近くである。チョコレート色、赤色、緑色の釉薬は、Tomura（外村？）、冠ヶ岳、Sasa-no-dan（笹の段？）から得られる。一方、伊敷からは水甕や粗い焼物で大きなものを作る時に使う釉薬が供給される。

ロクロは、3種のサイズのものが使われ、もっとも小さいものは3インチの厚さで、直径が上のは15インチ、下のが18インチの木製の円盤で、長さ7インチ以上の4本の垂直な棒を通して、上の盤の下側のソケットに入れてある。陶工は、穴の縁に腰かけて、ロクロを左足で回す。大きなロクロは、小さなものの2倍のサイズである。

窯は、町並みに平行な丘の面に建設されている。窯の構造は、炎や熱風が窯の下部から上部へ通り易いように、多くの小室に分かれている。すべての小室には、焼物を出し入れする穴があけてある。もちろん火を焚いている時は閉じられており、小さい穴は職工が焼き具合を見ることができるようになっている。燃料は、約6平方インチある最下部の小室に置かれ、長さ約2フィート、直径4インチの松の丸太である。

1回火を焚くのに通常36時間かかり、250～260把の薪が必要である。褐色の陶器を焼いている間は休止しない。また、物は2段目を逆さにして互に積み重ねるので、それらを窯から出す時には、必然的に軽くくっついている。そこで、木片でそれらを軽くたたいて上手にはばす。さらに、お茶を詰めておくのに使用する大きな甕のような重いもの場合は、それらをはなしておくために、小さな乾いた粘土のかたまりを差し込んでおく。

釉薬は、浸して付けられる。たとえば、急須のようなものは逆さにして液の中に浸される。そのようなやり方で、内側にはほとんど付かない。それから、すばやくひっくり返すと、釉薬は平均に美しく流れる。釉薬が乾いた時には、黄灰色、半透明になる。これらは、品物が火にかけられる前に掛けられる。

もっとすばらしい種類の陶器に使用されるもの、すなわち金を絵具のように入れて飾る彩色絵、錦

絵のものは、霧島山、指宿、山ヶ野金山の白粘土、加世田、Kushiki（久志？）の白い岩石、小湊の白砂から作る。加えるに指宿からは、バラと呼ばれるものが供給される。それは、たいへん壊れやすいと言われており、焼物に何か磁器のような性質を与える。加世田の岩石は、粉にしてナラの木や他の堅い木の灰と混ぜて、釉薬に使われる。

粘土や岩石は、良く突き碎き、水に浸して受け器をおいた目の細かい篩を何回か通す。底に落ちた細粉を取り上げ、板の上で乾燥する。この過程は、水干しと呼ばれ、通常生産の一過程である。上質の白色陶器に使う、前もって水干ししていた4種類の粘土は、バラや加世田の白色の岩石と一緒に経験のある職工が知っているある割合に混合される。

この原料の塊は、木製ブロックの上に置かれ、約3,000回ハンマーで打ち、粗製の原料の状態までにする。実際には、陶工の使う粘土にするために、もう約3,000回打つことが必要である。質を良くするためには、もう少し多く打つようである。

錦絵とか彩色絵を焼く窯は1室のもので、壁の厚さは約6〔日本〕インチ（寸？）あり、基礎のレンガの上に粘土を貼り付けて作ったものである。火は、窯の前の口から焚かれ、素焼の入っている間接加熱室を自由に循環する熱風は、ここから上方に通る。窯の大きさは、次のようなものである。

1 外部

高さ	5.5フィート（日本の単位）（尺？）
直径	4.5フィート（日本の単位）（尺？）
熱風の通り道の長さ	5.0フィート（日本の単位）（尺？）

2 内部

高さ	4.5フィート
直径	3.5フィート
熱風の通り道の長さ	1.2フィート
幅	0.9フィート

幅4インチの空間が、間接加熱室と窯の内壁の間に残されている。

錦絵には、3回の燃焼が必要である。最初は、釉薬をつけた後の素焼、2回目は絵付けや金を被せた後の本焼き、3回目は色を出すためにゆっくりと、代表的には24、48、10時間続けて火を燃やす。最後の燃焼中、温度は頂上近くの穴から時々観察される。試験は、温度の上昇に従って色合いが変化する、いろいろな顔料をつけた陶器の破片で行う。鹿児島県庁の覚書には、工業博覧会委員会が、昨年秋に江戸で開かれた時のすばらしい薩摩焼のいろいろな色を出す顔料の割合が示されている。王立技術大学のエドワード・ディバース教授は、親切にも江戸で作られたこれらの物の資料を試験してくださり、そしてそれらの英語名を教えてくださいました。いろいろな色の混合は、次のようなものである。

赤色—白色ガラス鉛（シラタマノコ）、白鉛（トウノツチ）、鉄丹あるいは鉄の赤色酸化物（ベンガラ）、日之岡土と呼ばれる珪質の土をすりつぶしたもの。

緑色—白色ガラス、白鉛、銅の酸塩化物（緑しょう）、珪質の土類をすりつぶしたもの。

黄色—白色ガラス、赤色鉛（光明丹）、珪質土類、金属アンチモニー（taushirome）をすりつぶしたもの。

白色—白色ガラス，珪質土類，白鉛をすりつぶしたもの。

青色—ガラスとスマルト（青色ガラスをすりつぶしたもので、この色はコバルトによるものであり、日本名は花紺青である）。

紫色—白色ガラス，白鉛，マンガンをすりつぶしたもの。

黒色—白色ガラス，白鉛，少量のコバルト（烏鉛生）をもつマンガン鉱物，珪質の銅炭化物をすりつぶしたもの，孔雀石（塩抜き緑青）をすりつぶし水洗したもの。

沈寿官の製陶工場で、私は白色粘土で模型を作っているグループを見た。それは、焼いて釉薬をかけた後、うすいクリーム色になり、薩摩のヒビ焼として知られるものになった。これらの作品は、後からみがき、彩色される。ここで、陶工たちは丁字風炉と小犬と遊ぶ子供の図の二つの古い無地の陶器を持っていた。

丁字風炉は、火鉢と湯沸しの二つのものからできた器具である。丁字の木の油を蒸留するために使うものであるが、実際は装飾のために使われる。

2人の職人が、白色の観音と達磨を作っている。それは、仏教徒の考える顔と服装をしており、同じ長さのものであった。3人目は、猫の中で気どったように座っている虎を作っており、でき上がった時の高さは、2.5（日本）フィートになる。それらの絵の大部分は、墨で描かれるが、彩色は記憶によって行われる。

14年前まで、べっ甲焼と呼ばれていたものが、これは色が亀の甲らに似ているものだが、この村で作られた。それは普通の焼物で、大部分は長崎の方へ出された。この種の古いものを私は見せてもらったが、しみみたいなものがあり、普通の色である黄色や褐色のほかに、緑のしみがついたものであった。

玉山の共同工場では、すべての種類の焼物を生産している。普通の褐色の陶器、できの良くない青色や白色のけばけばしいヒビ焼の陶器も作っている。

ここで、私は『Christian Observer』と呼ばれる宗教的雑誌にある感傷的木版画をまねて、キリストの小彫像を作っている職工を見つけた。彼は、かなり正確に顔やあごひげを作っていたが、像は仏教僧の礼服を着ていた。

アメリカの鉄製のものをまねた褐色の陶器製ストーブは常に作られており、それらの値段は江戸に持って行くと7ドルである。

私は、非常に大きな白色の花瓶を見た。それは、伝統的な形にとらわれず、オリジナリティを加えようと考えた結果、六角形、円、四角形を積み重ねた形であり、ごちゃごちゃなものになっている。

高麗人（このように呼ばれている）自身にとって重要なことは、陶工であると同時に百姓でもある村の住民が、伊集院という薩摩の武士によって、慶長年間（1596～1615）に朝鮮から連れられてきたということである。約3年前までは、彼らは髪を頭の上で結んでいたが、今では大部分の者が、日本式に髷を結っているか、または広く紹介されているように髪を切っている。

彼らの語ったところによると、以前は特別の場合、たとえば薩摩の領主が江戸へ向かう途中、村を通る時に敬意を表するために彼らの民族衣装を着けていた。陶工の1人は、かつて彼らが着たように、この衣裳を着てみせた。彼は、暗青色の絹製の幅広いズボンをはく。そのズボンは、たいへん繊細な

もので、脚の間が分離していない普通の日本の袴とは違っているが、同じような方法、すなわち前部は腰をまわってきた紐で結び、後部は前で花結びをした紐でしばるのである。次に、彼は袖幅の広いマント、あるいは似たような色、構造の羽織に肩を入れ、最後に長い円錐形の縁の白い黒のつばなし帽子をかぶり、またある種の蔦の茎を縫いつけた広いつばのある帽子を取り出した。

朝鮮語の知識は、彼らの中の何人かによって伝えられている。彼の仕事は、朝鮮人のジャンク船乗組員と日本人役所との間の通訳である。

僧院の滅亡以前は、疑いなく彼らの故国の先祖もそうであるが、この村の住民は天台宗に属していた。現在、彼らは日本の神のもとにあり、村の南西側の丘の上にある神社は、玉山宮と呼ばれている。神社の前には、青色を帯びた白色陶器製の1対の灯籠が立っている。これは、16~17姓の陶工達によって寄贈されたもので、台には名前が刻んである。

この神社に行く道筋にある共同墓地の墓石は、日本人の墓と同じである。日本人墓の碑の形式は、本質的にインドの仏教のものであり、朝鮮から移入されたものにもっと似ている。

これらの人々は、中国でそうであるように同一姓内で自由に結婚をしているように思える。しかし、彼らが武士階級である以外は、めったに日本人とは結婚しない。

私は、村民との会話から、彼ら自身が彼らの先祖が移住した国の土着民にとっても勝っていると考えているように推測している。

2 KERAMIC ART OF JAPAN

GEORGE ASHDOWN AUDSLEY

JAMES LORD BOWES

この本は、1875（明治8）年イギリスのリバプールで出版されたもので、大きさは縦41.0、横31.0、上下2冊からなる皮表紙の豪華本で、著者、出版社等は、次のとおりである。筆者については、建築家及びリバプール芸術クラブ会長と記載があるのみで、詳細は不明である。

著者：GEORGE ASHDOWN AUDSLEY（建築家）

JAMES LORD BOWES（リバプール芸術クラブ会長）

出版：1875年

出版社：クラブ会員のために著者が出版（リバプール）

HENRY SOTHERAN & CO.（ロンドン）

1冊目は、日本の陶磁器を詳しく紹介したもので、「緒言」、「日本美術の概要」、「日本の陶磁器」で構成されており、肥前焼、薩摩焼、伊勢焼、加賀焼、京都焼、尾張（瀬戸）焼を取り上げている。2冊目は、各窯ごとの作品を紹介文と共に多色刷りの詳細なリトグラフ及びモノクロームの写真で紹介している。薩摩焼は、図版の11から20までカラー（32点）、21から23までモノクロ（19点）を掲載している。なお、「世界のさつま」展で展示した「錦手唐子雪遊置物」（個人蔵）は、このモノクロームの部分で紹介されている作品そのものであることが確認できた。ここに紹介する資料は、1冊目にある薩摩焼の紹介部分で、33ページから38ページにわたっている。

この資料は、翻訳に当たり鹿児島市在住の高橋修身氏の多大なご協力により、紹介できることになっ

た。

(翻訳) 薩摩焼

薩摩の国は、九州の南西部に位置し、陶器の大きな生産地である肥前の国からさほど遠くないところにある。肥前の国はここから西北の方向に湾を隔てて対岸にある。

薩摩で陶器がいつ頃から作り始められたかを、確認することは至難の技である。薩摩の国が数世紀にわたって素晴らしい陶器を作ってきたのは確かであるが、それがいつ頃からだったか現時点で入手できるどんな資料でも確認できない。ウィーン万国博覧会の時、陶器芸術に関しては日本の権威者と言われる人に確かめてみたが、その人も陶器の製造が始まった時代を認定するに足る歴史的事実を知らなかった。陶芸が薩摩の国に伝達されたのは、肥前の国に伝わった直後、または、遅くとも肥前で陶芸が開花し、根付いた直後であると考えて間違いないと思う。

薩摩の人達は、なにごとにおいても、即座に新しい知識を吸収し、それを作って売買したりする能力が際立っていたと言われている。従って、肥前の近隣の地域で盛んに行われていたと思われる陶芸のような重要かつ有用な芸術が、そんなに長く薩摩に伝わらなかった筈はないし、習得されなかった筈はない。それにもかかわらず、ヨーロッパに輸出された初期の頃の日本の陶磁器を調べても、この様な推測が正しいという裏付けが得られない。おびただしい数の肥前の陶器が、長崎のオランダ村から出荷され、その焼物は今でもヨーロッパのいたる所に散らばっているということは良く知られているが、しかし、公的機関が所蔵しているものから、個人が所蔵しているものまで、その収集品の全てをどんなに詳しく調べてみても、その中には現在薩摩焼として知られている焼物にそっくりなものが見つからない。概して言えば、この初期の輸入品は全て焼き方が同じで、堅い白磁でできており、明らかに同一系統の窯場で模様や色付けがなされたものと思われる。

日本の陶器に関する研究には、この国における陶芸についての歴史的な記録は欠かせない。この本を出版するに当たっても、現時点でヨーロッパで入手できる陶器や磁器をできるだけ多量に収集し、年代別に、地理別に、正確に分類することを至上命令として調べたが、残念ながら歴史的記録を示す文献は入手できなかったし、現地の人に問合わせてみたが、その様な文献を知っている人も探すことはできなかった。

日本には、その時流行している芸術や産業に関する文献のようなものを残すことは、全くなかったとは言うのは言い過ぎとしても、あくまでもわれわれの見解であるが、日本の芸術職人の技術を後世に残したり鑑賞眼を高めたりするためには、文献として残すことよりも、簡単なメモ書き程度に止めることの方が圧倒的に多かったと言っていいかも知れない。

さて、本章の主題に戻ることにする。薩摩の陶芸は、肥前の周辺地域に陶芸が伝わった直後に始まったのではないかという仮説をあえて立てたが、この仮説は、薩摩焼が肥前焼とほぼ同じ時期に始まったという日本の定説と合致している。

現在薩摩焼として認定されているものは、さほど昔に焼かれたものではないことははっきりしている。我々が鑑定したもののうち一番古いものでも、250年以上前に焼かれたものはない。イギリスに輸入されたもののうち、薩摩焼であると鑑定されている最古の作品は、その焼き方がかなり粗雑であ

る。現在、ウォルターコレクションに所蔵されているものの一つなどは、現在の収集家が薩摩焼と思っているものとは似ても似つかないもので、ざらざらした黒い粘土でできており、籠に似た形をしていて、ほんとの初期のものという以外は芸術品としての価値はほとんどない。この作品は日本から直接送られた薩摩の最古の焼物で、数百年前のものと言われている。その外観はどんな古美術とも比較しようがないくらい劣り、後世のなんとも優美で芸術的な薩摩焼とは、どんなに結び付けようとしても結び付けることができない。もう一つは、バウスコレクションに所蔵されているもので、紛れもなく薩摩焼の作品の一つであるが、明らかにクリーム色の焼物が作られる以前のものである。こげ茶色で、部分的に釉薬の掛かった水差しで、信頼すべき当地の専門家によると、これは茶道具の一つで、昔、薩摩藩主達が京都宮廷への献上品として贈ったものの一つと言われている。これらの水差しは、当時かなり評価が高かったと思われる。後世の人達は、これをお茶に使うにしろ、装飾品としてその美しさを観賞するにしろ、実際の価値以上に高く評価して、盛り上げ漆で装飾した漆の箱の中に入れて飾ってきたと思われる。

これらの焼物は、薩摩でかなり早い時期に焼かれたと考えて差支えない。どうみても鉱物が豊富に生産される国に住んでいる勤勉で器用な日本の民が、粘土を焼くと使用価値の高い品物になるというその特性とその焼き方を遠い昔のこととは言え、長い間全然知らなかったとは考えにくい。

この本の編纂という目的からすると、薩摩焼がいつごろから始まったかこれ以上詮索する必要はない。後に薩摩の国で焼かれた陶芸品は、柔らかな色調で焼かれ、花、鳥などの絵模様が入った美しい作品で、日本以外で焼かれたどんな陶芸品にも見られない優美さと芸術性を持っており、これらの後に焼かれた作品に関してこそ、調べなければならないことが沢山あるからである。

1592年頃、日本は韓国を侵略し、その時の武将の一人であった薩摩の領主島津義弘（注：原文では島津義久となっている）が日本へ帰る時、韓国からかなりの数の焼物に熟練した陶工を連れ帰り、鹿見島近郊に住まわせたと言われている。この韓国の人たちは家族を伴ってきており、一緒に来た人達と共に快適な家庭生活を送りながら仕事に取り掛かり、直ぐに近くで手に入る多種類の材料をいろいろ焼いてみたに違いない。そして、何回も試行錯誤している間に、もともと優れた技術を持った陶工たちは、硬い焼物を焼くのに成功したと思われる。これが今、「薩摩焼」という名前で知られている焼物である。この韓国の人達は、つい最近まで、日本人と全く違う生活をしており、母国の言葉や生活慣習を殆どそのまま伝承していた。彼等は、日本人との結婚を禁止され、日本人の権利や特権を十分には使うことができなかつた。しかし、現在では彼等の子孫たちは、日本国民として公民権を得ている。

極めて残念なのは、薩摩焼の陶器に制作年月が記されていないために、最初に韓国の人達が焼いた作品がどれで、例えそれが無理でも、せめて初期の作品がどれだとさえ見分けることができないことである。この美しい薩摩焼が、一番最初どのように焼かれたのかは極めて興味深く、もしそれがわかると、その焼き方の違いを年代ごとに分類するのは簡単である。しかし、最初の試作品が粗雑で未熟であったかと言えば、必ずしもそうは考えられない。というのは、当時の陶工達は、韓国や中国の陶磁器焼の専門家で、その技術には精通していたに違いないからである。薩摩の領主は、当然のことながら、その最高、最熟練の技術を確保しようとした。薩摩の支援を受けるために、陶工達は、その持つ

ている技巧の全てを新しい仕事に傾けたのは当然のことと言える。

韓国人の捕虜達（事実、彼等はそのように呼ばれていた）が定住した後ですら、鹿児島隣の隣人たちが薩摩焼の窯元の窯主の座にとどまっている。このことを裏付けるかの如くに、地元のある権威者が、後になってから平佐という町で、ある陶磁器の窯が設立され、苗代川という村では、韓国人の子孫たちが定住して、普通の陶磁器に加えて、殆ど黒に近い色のものも作っていると話している。この黒い陶器は、茶器やローソク立てとして有名で、日本人はこの苗代川で作られる作品に「苗代川焼」と命名している。

通常、薩摩焼として知られている焼物は、その色合いは非常に明るく、少し灰色がかった白色から皮革色のものまでである。大切に使われて汚れが少ない焼き物は、一般的には寒色をしている。表面は、非常に硬く、きめが滑らかなので、半磁器と呼んでもいいかも知れない。この制作に使われている粘土は耐火性が高いので、かなり高温でも全く溶けない。釉薬には、長石を含む材料と濾した木灰が含まれているが、ホウ素や鉛は含まれていない。乾燥室にしばらく放置した後、中程度の熱で焼き、「ビスケット（素焼）」状にする。その後、釉薬の中に漬け、最後に大きな窯で高温で焼く。これが冷める時に、粘土本体と釉薬の間に収縮の差が生じ、その結果、表面全体に網の目のように細かなヒビができる。日本人は、なぜヒビの入った焼物のできる釉薬を好むのか？。すなわち、ヨーロッパでは全く未熟な作品と言われるヒビの入った焼物のできる釉薬を、なぜ選ぶのか？。このことは、長い間の大きな謎であった。しかし、本当の芸術的感性を持った人にとって、そんなことは全く驚くに値しない。表面のヒビが、極めて優れた色彩装飾であることは、明らかだからである。薄い透明な表面のヒビに、無数の角度から光が入って反射し、その表面に深みのある豊かな美しさを醸し出す。古い薩摩焼の中の優れた作品ほど、その表面には色彩装飾がうまく取り入れられて調和しており、このような高い効果を上げるものは、他のどんな陶器芸術品の中にも見られないと言っても過言ではない。薩摩焼は、日本の土焼と言われているものの一つで、粘土または土で出来ていることが特徴で、磁器と区別されている。

薩摩焼に使われている粘土には、幾つかの特質が見られる。最も初期の作品は、非常に硬く、表面には大きなヒビはなく、むしろすべすべして象牙のように見える。これらの作品は、半中国風、または、韓国人達が、日本に定着する前に最も精通していたと思われる方法で装飾されている。この初期のものとその後の陶器には、殆ど磁器に近いものから、石のようなもの、そして、本来の陶器のものまで、その硬さや素地の細かさに多くの異なる種類が見られる。

この様に、種類が多いために、収集家はその薩摩焼が本物かどうかを鑑定するのに大変苦勞する。更に難しくしているのは、京都の焼物と薩摩の焼物とに、非常に良く似たところがあることである。古い作品では、はっきり鑑定することができないものさえある。多くの場合、装飾の方法によって見分けるが、この方法も、必ずしも信頼がおけるとは限らない。と言うのは、他の芸術分野でもそうだが、京都では日本中の地方にある芸術の本場から発信されるものに非常に似た作品を作っていた気配があるからである。京都の芸術家たちは、昔から、地方の本場の職工達や画家達が独自の発想で作った作品をモデルにして制作したと考えてほぼ間違いはない。そう考えないと、薩摩と京都の作品がよく似ていることを説明できない。

日本の陶芸品の分類作業を難しくしている、もう一つの問題がある。それは、装飾だけが京都で行われているものがあるという、装飾の特異性である。信頼すべき専門家によると、昔は地方で作られた素焼は京都に送られ、そこでずば抜けて優れた絵付師によって装飾がされたという。韓国の陶芸家たちが薩摩で焼いた素焼きは日本中で高い評価を受けていたので、その作品の多くが、装飾を施されない状態で京都の工房に届けられたということは十分考えられることである。現在ヨーロッパにあるコレクションの中には、焼き方は正真正銘の薩摩焼と殆ど同じだが、装飾は京都の系統をひいていると思われる日本の陶磁器がたくさんある。その中でも最も典型的なのは、リバプール市長 バークレイ ウォーカー閣下所蔵の豪華な花瓶（図版番号XVに描かれているもの〈金襴手羅漢図耳付花瓶〉）のような宗教的な題材を描いた作品である。この作品は、窯は明らかに薩摩であるが、装飾の仕上げは典型的な京都流である。このような組み合わせのものは、研究には非常に役に立つ。このような代表的な作品をよく調べることによって、この作品が作られた時代に、天皇が住む町（京都）で、どのような陶磁器が、最高の芸術性と極限の技巧を備えているとして評価が高かったかがよくわかる。

ヨーロッパのディーラー達が日本の陶磁器についてよく知らないこと、また、日本にいて送り出す側の輸出商や代理店が正確な知識を持っていないことも、また日本の陶磁器に興味を持つヨーロッパ人を混乱させてしまっている。輸入する側のヨーロッパのディーラー達が十分な知識を持っていないとしてもさほど驚かないとしても、日本から輸出する側のヨーロッパの代理店の人達が、ひどいまちがいを犯していることには驚いてしまう。最近京都で焼かれた作品に、まだ現存の有名な陶工の名を入れて、これは「薩摩焼」だと言って発送したり、カタログにもそう書いて販売しているのをいやというほど見た。これは、日本にいるディーラー達が、薩摩の陶磁器といえば高値がつくこと、これを買う人は陶磁器の鑑定能力が低いことを知っていて、品質の悪い品物を薩摩焼だと言って発送したり、注文生産したり、容易に買入れたためとしか説明できない。

しかし、上記の現代京都焼は、色合いが黄褐色で、本体は軽く、多くの孔があり、ヒビの入った、明るいガラスのような釉薬が掛かっており、薩摩焼とは簡単に見分けることができる。石の様に硬く、半磁器という純正薩摩焼粘土の特質は、この偽物の京都の焼物には全く見られない。また、これには、必ずしも名が入っているとは限らない。明らかに意図的に作られた模造品には、純正の薩摩焼と同様、名が入っていない。この現代の京都焼の詳細については、京都焼の章で詳しく述べることにする。

薩摩焼の模造品は、ここ数年の間、横浜の近郊にある大田という所で、香山という陶工が作っており、瓢箪型をした渦巻模様のこの陶工のマークが付いているものもある。この陶器は、横浜港における薩摩焼の需要に応えるために作られたに違いない。この粘土は、日本の焼き物の模造品ほどにはまぎらわしくないが、外見は純正の薩摩焼に非常によく似ている。薩摩焼ほどには硬くないので、鉄製品にあたるときずが付きやすく、また、衝撃が加えられるとすぐにひびが入ってしまう。純正の薩摩焼に比べると、色調は白く、釉薬を掛けた表面に入っているヒビは、それほど細かくなく、形も一定ではない。

薩摩焼の作品に見られる装飾は四つに分類することができる。

第1分類：デザインが簡単で、明らかに中国や韓国のものをそのままねたり、それにヒントを得て描かれたもの。古い薩摩焼にたまにみられる。

第2分類：宗教または神話の登場人物，風景，動物などを深みのある落ち着いた色調のエナメル（釉薬）と金をふんだんに使って描いており，非常によく調和がとれている。これは，京都焼の装飾にそっくりで，このことが，薩摩焼は京都の絵付師によって装飾されたもの，もしくは，彼等の絵付の練習作品ではないかと信じたくなる原因である。

第3分類：菱形模様，円形模様，良く見られる月並みな模様が描かれており，優れた作品の場合，極めて繊細に，あでやかな色を使って描かれ，光沢剤や艶消し剤など金の絵付けもふんだんに使われている。

第4分類：花や鳥の構図。これは，装飾の中で最も一般的なもので，一時期は薩摩焼の典型的な特徴と考えられていた。現在では，花や鳥は日本の陶磁器に共通してみられる。

中期の陶磁器には，花のデザインが自由に使われているが，花はそれほど細かく詰めて描かれておらず，極めて芸術的な配置と着色がされている。色は，一般的には落ち着いた色調で，少し光沢のあるいっぼう変わったさえない赤のエナメルがよく使われている。後期の作品では，花が非常に詰めて細かく描かれ，強烈に深みのある着色がされている。しかし，実際には，それぞれの作品がこのような分類通りには描かれてはいないので，作品をこのような分類別に分けようとしてもそれは不可能である。過渡期に作られて作品では，上記の分類の2つ以上の手法で日本の芸術家特有の技巧を使って描かれているからである。

以上，薩摩焼発祥400周年記念展「世界のさつま」の開催準備段階で目に触れた文献を紹介したが，今後薩摩焼の研究にいささかでも役に立てば幸いである。



(『Keramic Art of Japan』鹿児島市 鶴田伸正氏蔵)

